
唯一の治癒剣士

早市賢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯一の治癒剣士

【Nコード】

N5733Y

【作者名】

早市賢

【あらすじ】

五歳の時、『無能』と診断されたルークは、強くなるために剣を極める。

しかし、実際彼は無能なんかではなく……

世界でたった一つの才能に愛された少年の最強物語！

誓い（前書き）

拙い文章ですが、少しでも満足していただけたら幸いです。

誓い

「やーいやーい、この無能がっ！」

そう言われて、少年は石を投げつけられた。

体重の乗った、いいフォームで放たれた石は少年の瞼の上にガツツと衝撃を与える。

「いってー……」

涙目になりながら少年は、眼の前にいる同い年の子供たちを睨みつける。

子供たちは全員で八人。とてもでないが、少年一人でどうこうできる人数ではなかった。

八人の内のリーダーのような、その年にしては大きい男の子はニヤニヤしながら手に石を持つ。

「何だよその眼は……よっ！」

ガツン

また投げられた。

今度は左の頬。石の角に当たったらしく、皮膚が切り裂かれて赤い血がつーっと流れる。

だが少年は構わず睨みつける。

「オイオイ無能のくせにいつちよまえに睨みつけてるぜ」

「ああ、しかも無能のくせに血が赤いぞ！」

「ああ、世界一の無能のくせに生意気だな」

少年の周りから様々な悪口が飛んでくる。

そしてその一言一言が少年の胸の奥に抉るように突き刺さる。

少年は今にでも胸を押さえて泣きたくなるのをこらえて、必死に虚勢と言う名の睨みを利かせていた。

……だが、もう限界だった。

少年は目の前にいる子供たちから離れるべく体を動かした。

——とここで、

「おっと！ 手が滑った！」

リーダーのような男のは少年の横っ腹にドロップキックを見舞った。
「ぐふっ」と、腹から無理やり息を吐き出させるような声を上げて少年は倒れる。

腹を抱え痛そうに包まる少年をよそに、子供たちは次々と「手が滑ったー！」と言って蹴りをぶつけてくる。

（痛い……痛い痛い痛い痛い！）

涙があふれてくる。

苦しくて、痛くて、悔しくて……。

「つか、これって足じゃねーか？ 手じゃないぞ！」

情けなくて、悲しくて、カッコ悪くて……。

「あ、そうだな。あははははははははっ」

（全部……全部あの日がいけないんだ！ あの日さえ来なければ、俺は今頃楽しくやっていけたのに！ こんなに痛い思いも辛い思いもしなくて済んだのに！）

そう、あの日。

少年にとって、すべてが色褪せた日。

それと同時に全てが、これからの未来さえも変えた日だ。

剣と魔法の世界。

この世界では剣の努力と魔術の才能が、人々の生活を大きく動かしていた。

訓練次第では底辺にでも頂点にでもなれる剣。

それとは真反対に五歳までである程度将来のレベルが分かる魔法。

二つは正反対だ。

『動』の剣と『静』の魔法。

そしてどちらも力だ。

だが、国が強く求めるのは当然のように魔法だった。

才能は限られたものにしか与えられない。

さらに言えば才能はその実力の差を顕著に表している。とてもでないが、努力で覆せるものではない。いや、覆せるのなら、それはその程度という認識になる。そう言うレベルだ。

才能のある者と才能のない者への道は二点において判断される。

一つ目は所有属性の数。

魔法には属性がある。

火、水、土、雷、風、光、闇の計八つだ。

どんな者でも一つは属性を持っている。

これは世間の常識である。

そんな中で、ピラミットのように二個持つ者は一つ持つ者よりも人数が少なく、三つ持つ者は二つ持つ者よりも人数が少なく……となっている。

その差は圧倒的で、二個以上持っている者は、世界人口の四分の一に満たない。

そして才ある者は、普通は三つ以上は所有している。

二つ目に魔力量だ。

人間の体内に保有されている魔力の量。

これはまだ検査方法が確立されているわけではないので、はっきりと区切り線を付けることが出来ないが、その量によっては、所有属性の数を覆すことが可能と言われている。

以上の二点から、その者の才能の有無が決定される。

そして国の決まりで五歳になった子供を検査の対象としている。

少年は二年前、村の子供たちとみんなで検査を受けた。

当時の彼らは、その検査にどんな意味があるかなんて理解しているはずもなく、誰ひとり緊張感を出さずに気楽に、いつもみんなで遊んでいる時みたいに屈託のない笑顔で会話していた。

次、と少年は呼ばれて検査室の中に入っていく。

検査室とはそのままの意味で、検査する部屋だ。

明かりの灯されていない一室の中央に、机が配置されその上に水晶が置いてあり、傍に二人の男が立っていた。

「では、この水晶の上に掌を当ててください」

子供に対して敬語なのに、少年は首をかしげながら、自分の手を水晶の上にかざした。

「……………」

「……………」

しかし何も起こらなかった。

「ど、どういうことだ？」

「さ、さあ……もしかしたら水晶が壊れたんじゃないか？」

「ああ、なるほど」

男達は焦りながらも、自信の中で納得のいく結論にたどりつき、水晶を新しいのに変えた。

「さあ、気を取り直して、どうぞ」

少年は言われたとおりに掌をもう一度かざす。

「……………反応がないぞ」

「……………これは一体」

驚愕に口をみっともなく開けている男達を見て、少年は面白そうに笑った。

その後の下される検査結果のことなど、知る由もなく。

「こらぁーっ！ あんた達何してんのよ！」

みつともなく蹴られている少年の耳に、キーンとつんざく高い女の子の声が聞こえた。

「げ！？ エリーかよ！？ みんな逃げるぞ！」

こっちに大声で叫びながら駆けてくる女の子を見て、リーダーの男の子は顔を青い色に変えて、反対方向に走り出した。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

と、少女が叫ぶものの、「待てと言われて待つバカはいない！」とカッコよく逃げの決め台詞を吐いて、子供たちはどこかへ逃げて行ってしまった。

「ルーク！ 大丈夫！？」

少女は少年の前に立つと、先ほどの鬼のような顔はどこへ行った、と聞きたくなるほど心配そうな表情をしている。

「ゴホッゴホッ……だい………じょうぶ、ゴホッゴホッ」

苦しそうに咳を吐きだし、空気を求める。先ほどまでは何度も何度も蹴られていたため、呼吸すらままならなかったのだ。そんな少年を見て、少女は再び顔を怒りで覆い尽くす。

「……あいつら………いい加減にやり過ぎだよ。私がつぶしてくる

！」

「待って！」

激情のままに突き進もうとした少女を少年はすぐさま止めた。

「別に……いい」

「いいって……だって、ルークがこんなにされたんだよ！？　もういい加減黙ってられないよ！」

「……俺は大丈夫だから」

「だって……だって……ルーク、このままだと死んじゃうよ？　あいつら、絶対調子に乗ってるもん！」

「大丈夫、大丈夫だから……」

涙目になっている少女の髪を少年は優しくなでる。

始めは涙目の上目遣いで心配した顔をしていたが、その手心地がいのだか、少女は目を細め、今にでも「ゴロゴロニャー」とでも言いそうだ。

あの日、少年は『属性保有なし、魔力0』の『無能』と診断された。その結果を見た友達は指を指して笑い、大人たちは可哀そうなモノでも見るような、あるいは絶対にあるモノがない、ある種普通ではない少年に薄気味悪さを感じているような、そんな視線を送っていた。

変わってしまった。

今まで綺麗に輝いて見えたこの村が、いつの間にか自分を汚物とみなしている、いいようにない居心地の悪さを感じるようになった。

そんな中でも、少年の父親と少女だけは変わらなかった。

いつも通り接して、いつも通り話して、いつも通りに遊ぶ。

父親と少女がいたからこそ、少年は今を生きていける。

そう思えるほどに二人は少年の心を支えていた。

（才能なんて……関係ないっ！俺が弱いからだ！！）

だから、今、自分のために泣いてくれる、あるいは自分のせいで泣かせてしまった少女を見て、決心した。

「俺、剣を極めるよ」

「え？」

「こんな俺でも、エリーを守るくらいに、俺は強くなるよ」

少年は空を見上げる。

その景色は2年前から変わってしまった空だった。

だが、少し、空が笑っている気がした。

それは馬鹿にしているのではなく。

応援してくれているみたいだった。

決意（前書き）

開いていただいております。

決意

王国の中心都市、王都『ベルゼア』から約二十キロほど離れた地を覆う、立ち入り禁止地域、『鬼人の森』。

この森には、その名の通り鬼人が村をなして生息している。

なぜこの地が禁止地域に指定されているかというと、簡単な話、鬼人族と友好関係が掴めていないからだ。

世界には多くの種族が存在している。

人間族、エルフ、ドワーフ、獣人族、鬼人族、竜族、魔族。

彼らは、村をなし、町をなし、国をなし、暮らしている。

ただ、世界は常に平和ではない。

違う種族が近くにいると、それだけで無性に嫌悪感が浮かび上がってくる種族もいるのだ。

その代表が人間族と魔族だ。

人間族は、自分たちこそが神に最も近い存在だと信じ、魔族は我こそが最強の種族であると確信している。

つまり、どちらも他種族を下等な生き物と思っているのだ。

もちろん、すべての人間がそう思っているわけではない。

中には他種族が持っている、人間では到底思いつかないような技術

を学ぶべく頭を下げている者もいる。

しかし、やはり傲慢な人間の方が多いのもまた事実。

中には、平和を願っている種族の村を襲い、奴隷にするために連れ去るなんてことも、珍しいことではない。

そして、彼らがそう言う考えを持っていることを他の種族も知っている。

だからこそ、どの種族も人間族に関わろうとしないのだ。

鬼人族もその例に当てはまる。

ただ、例外もあるのだが……

鬼人の森の東部で、一人の人間が五匹もの魔物に囲まれていた。

魔物は、黒い体毛で覆われている四足獣のようだ。大きな尾を左右にゆっくり振って、人間を見つめている。

その目つきは獲物を狩るものだ。

せっかくの獲物を逃がさんとはかりに逃げ道を互いに封じあって、のどをうならせている。口からこぼれているよだれは、すでに人間を食べることを確定していると言わんばかりに振りまかれていた。

一方人間は落ち着いていた。

だいたい十五、六の青年。

身長は百八十センチくらいで、細くはなく、だが決して太くもなく、

至って普通の体つきをしている。茶髪の短髪に尖った目つき、鼻は高く、ほっそりとした小顔の顔立ち。

随分と男前な顔をしていた。

青年は腰のベルトに吊るしてある細長い剣の柄に手をおいたまま、冷静に魔物を見つめ返していた。

「グルルルルルッ！！」

低いうなり声を出しながら、魔物は前足に力を溜めこみ、地を蹴った。

勢いのついた動きは、たった一步で青年の前まで到達させる。二歩目に行く際に口を大きく開け、唾液の糸を引きながら、魔物の自慢の牙で襲いかかってくる。

それが五匹同時で行われたのだ。

もはや青年に逃げる道はなかった。

そう、『逃げ道』はないのだ。

青年は素早くベルトから剣を抜きとる。

抜き取った際に放った剣閃で、一匹目を切り裂く。続いて体を捻り、回転するように剣をふるい、二匹、三匹目と、始末する。最後に残りの二匹の間を駆け通り抜けるようにして、剣をクロスに動かし、四匹、五匹目を片づけた。

庄巻の一言だった。

魔物が一斉に襲って来てから、全てを終えるのにかった時間は一秒も経っていない。

そして、なによりすごいのは、そのわずかな時間に、的確に魔物のど元を切り裂いたことにある。

魔物の体皮は人間なんかと比べ物にならないくらいに堅い。

下手すれば剣の方が折れるかもしれない、それくらいに硬度があるのだ。

だが、のど元だけはほんのわずかだが、硬度が落ちると言われている。

これは実際証明されているが、魔物ののど元を攻撃するのはそれなりの技量がいる。

単純に考えて、魔物と向かい合ってその間合いまで行かなくてはならないのだ。

そう簡単なことではない。

しかし、青年はそれをいとも簡単に、それも五匹同時にやってのけた。

それが、今の青年——ルークの実力なのである。

「よしっ！ 帰るか」

剣をベルトに収めて、靴の中にはさんでおいた小刀を取りだしてから、魔物の体皮と肉の間を丁寧に切り取る。それが終わったら魔物の牙を歯ぐきを切り裂いてから抜き取った。

この作業を五匹分繰り返し返して、ルークは村に帰った。

「ただいまー」

「お、帰ってきたな」

青年は村の入り口に立っている門番のような男の元に向かった。

「今日はどうだった？ 大漁か？」

「んー、まあまあかな？ 二十匹ぐらいだよ」

「それをまあまあ何て言うのはお前ぐらいだよ、ルーク」

苦笑しながら男はルークの頭をクシャクシャとかきまわした。

「……何すんだよ」

「いいだろ、自分の息子の頭を触るくらい」

門番の男はルークの父、カイザだ。

茶髪の癖っ毛に目尻が下がっている目元は、ルークの醸し出す空気とまた違って、温和や安心を与えてくれる。ルークとカイザの共通点と言ったら、きっと髪の毛の色ぐらいだろう。

「いや、これ結構恥ずかしいんだけど……」

「むうう、息子が最近ドライになってきてしまった。これが反抗期と言うヤツか！」

「別に反抗してないと思うけど……？」

カイザは誰の目から見ても親バカである。

「まあ、それは後で話し合うとして」

「え、話し合うところ何かあったっけ？」

「……息子よ。父さんをあまりいじめないでくれ」

黒い影を背負ってうなだれている門番。

今なら、どんなヤツでも侵入できる気がする。

「分かったよ。で？」

「早く、村長に報告をしてきなさい。もうそろそろ、時間になるから」

カイザに言われてルークは太陽の位置を見る。
もうだいぶ傾いていた。

「うん、確かに。分かった、行ってくる」

「おう、行つて来い」

カイザに背中をバンツと叩かれて村に入り込んだルークは、真っ先に村で一番大きな建物である村長の家に向かった。

村の建物は、森の木を使って作られている。

建物を建てる際、魔法などは一切使用せず、村人全員で一つの家を建てるのが基本だ。一つ一つの作業を丁寧にこなし、時に失敗することもあるが、それでももう一度一からやり直して、完成させている。

それは村発足の時からの決まりとなっている。

仲間意識を高めるためらしい。

そうやって今の村になっていったが、発足当時から随分と外観は変わったという。

それが時代の流れなのか、はたまた成長なのか、彼らにはどうでもいいことだろう。

しかし、変わりゆく中でも変わらず残っているものがある。

村の決まりもそうだが、この村のシンボルともいえる建物。

それが村長の家だ。

長い年月を感じさせる。材料となっている木々は所々色が変わり果てており、少し壊れている部分もある。だが、どんな家よりも、絶

対に倒れなさそうな何かを思わせるものがあつた。それが歴史だらうか。

ルークはコンコンとドアをノックしてから村長の家に入った。

中は外から見た程、色褪せてはいない。

整理整頓され、手入れが駒井会ところまで行きとどいている。

むしろ綺麗とさえ思えるほどだ。

ドアから真つすぐ進むと、これまた木製の長方形のテーブルがあり、そこに肘をつけながら、じっとしている老人がいた。

「村長、狩りを終えてきました」

ルークがそう声を出すと、村長の体がぴくっと跳ねて、捉えどころのなかった目線をルークに向けた。

「おお、終わったかい？ 御苦労さま。どんなものが狩れたかい？」

「どうも。えっと、ウルフの毛皮と牙とです。最後に珍しく黒い体毛の魔物を狩ることが出来たので、その牙と毛皮は少しもらっておこうかと思います」

「む？ 黒い魔物かい？ ……まあよいか。うむ、報告御苦労」

「はい、では失礼します」

ルークは村長の家から出て行った。

「まさか黒ウルフを倒してくるとはの。それも複数。……カイザやあやつも言っておったし、もういい時期かもしれんな」
誰もいない村長の家で、彼は一人ではつりとつぶやいていた。

「――!？」

村長の家を出てから、自宅に向かって歩いているルークは、急に感じた気配に即座に対応して身を地面スレスレまでかがめた。

刹那、頭上をビュンツと風を切る音が通り過ぎる。

その音を確認したすぐ後、かがんだまま上体を起こし、腰から剣を抜いて気配の元の首元に当てた。

「……成長したな、ルーク」

視線の先にいるのは三十代くらいの男。

剛気を纏わせる体躯と常に獲物を狩るような獣のような目つき。知らない人が見れば、決して近づいてはいけない人、と判断するだろう。そして何より特徴的なのが、額から生えている角だ。

「ありがとうございます、――師匠」

十五センチほどの大きさを誇る角を持つ男。
彼こそがルークの人生で二人目の師匠であった。

ルークと男はしばし睨みあった後、やがて男の方から、ふーっと息を吐き、体の力を抜き去った。それに合わせてルークも力を抜く。

「お前らが来てからもう六年か……ずいぶんと経ったな」

男は、先ほどの剛気を風にでも流したように、優しい落ち着いた雰囲気になっていた。

「はい」

「そして、俺の元に来てからちょうど五年が経った」

「はい」

「覚えているか？ 五年前の今日、お前は土下座して俺に懇願してきたんだ。――鬼人族の俺の元に、人間のお前が、だ」

「はい」

「あのときはびっくりした。人間がこの村に住んだこともそうだが、何よりも、あれだけ人間至上主義の人間族が、弟子入りしてくるなんてな」

「はい」

くっくっく、と当時を思い出して、男は楽しそうに笑っていた。

「なあ、この村の師弟関係の決まりを知っているか？」

「『師弟関係を結んでいる限り、森の外に出てはいけない』 ってやつですか？」

「それ以外に」

「……いえ、知りません」

男は急にさびしそうな顔をして、言った。

「『師弟関係を結べるのは五年間だけ。その先は友として関係を結

ぶべし』ってやつだ」

その言葉を聞き、ルークは表情を崩した。

「それって――」

「つまりだ、今日で俺の弟子は終わりってわけだ」

ルークの言葉を遮って、男は何かをこらえるように言った。

「だからな、お前は行っているんだぞ？」

「……どこにですか？」

意地なっているようなルークを見て、さびしそうな顔から苦笑に変えた。

「王都だ。お前はやりたいたいことがあるって言ってただろ？」

「……………」

「俺はカイザと前々から話し合ってた、そろそろいいんじゃないかと、判断したんだ」

「……………」

「カイザの話だと、一週間後に王都のどこかで試験があるらしいし、ちよūdいいいんじゃないかってな」

「……………少し考えさせて――」

「何を言ってるんだ馬鹿もん！」

ください、とルークが言おうとしたところで、後ろからよく聞いている声が怒気を孕んで聞こえた。

振り向けばそこにいるのは父――カイザであった。

ルークはカイザを見た瞬間、眼を丸くした。

（父さんが……怒ってる？）

カイザは昔からルークにベタ惚れだった。

どんなにルークが迷惑をかけても、いたずらをして、笑顔を見せて「しょうがないな」と言うだけで、全くと言っていいほど『怒り』という感情を見せたことがなかった。そんなカイザが……怒っている。

いつもの笑顔でもなく、息子にいじめられてうなだれている顔でもなく、今までルークに見せたことのないような、顔を真っ赤にして、柔らかな目をキッと吊り上げて、そんな顔で、ルークの前に立っていた。

「何のために、ここまで頑張ってきたんだ？」

低くルークを突き刺すような声で、問う。

「守りたいんじゃないのか？ 安心させてやりたいんじゃないのか？」

——この六年間の彼の思いを。

「それとも……その程度なのか？」

「父さん、俺剣を極めたいんだ！」

ルークがカイザにそう言ったのは七歳のある日のこと。

その日のルークはいつにも増して、体がぼろぼろだった。

最近のルークはよく村の子供たちにいじめられているらしい。

その原因が所有属性がない、魔力がない、というたったそれだけの理由であったことに、カイザは腹が立った。

幾度となく、子供たちをぶちのめそうとしたが、怪我をしたことをいつもひた隠しにしているルークを見ると、どうしても踏みとどまってしまう。

幸い、エリーがルークと仲良くしてくれているみたいだから、いつかルークが自分を頼るまで介入しないようにしていたのだ。

そして、ついにルークはカイザを頼ってきた。
しかし、それは思ってもみない頼みだった。

『剣を極めたい』

それを聞いて、カイザが真っ先に思ったのは、この子は何て強いんだろう、であった。

普通の子供なら、『助けて』と救いを求めるのに、ルークは『自分で何とかしたい』と、そのための力を求めたのだ。

ただ、その力の使い道は間違えると、ルーク自身もいずれ滅ぼしてしまう。

だから、カイザは聞いた。

「なんで極めたいんだ？」と。

その問いにルークは考えることもなく、すぐさま答える。

「大切な人を安心させたい。それと、守ってあげたい」

これがルークの答え。

これがルークの求めるモノ。

こんなにも純粹で、こんなにも強い意志を持っている。

それならば――

「いいだろう、ルーク。俺が鍛えてやる」

正直、カイザは普通の人よりは実力がある、くらいのレベルだ。

とてもでないが、ルークの求める『剣を極めさせる』ことなんてできっこない。

だから、カイザは覚悟を決めた。

「この村を出るぞ」

外の世界にルークに触れさせ、あらゆることを吸収させる。

なにより、多くの経験を積ませる。

この点に置いて、村を出てルークと共に修業の旅に出ることを決めたのである。

「俺は、あの時決意したぞ。お前に剣を極めさせる『まで』が、俺に出来る最高の愛情だって、俺は決意したぞ！ お前の決意はどうした？ 悩むな、考えるな、本能ままに進め！ お前は、それが出来るくらいに力をつけたはずだ！」

カイザの鮮烈の気持ち。

それは使命や義務に近いモノがあり、だけど違う愛情、そして贖罪。

「『無能』な体で産ませてしまつてすまない」

「いじめられるような原因を作つてすまない」

そう胸の奥からの悲痛の叫び。

そう思うからこそ、カイザは伝えた。

ルークは、その言葉に、静かに、頷いた。

その決意はあの頃と全く同じで、むしろ膨れ上がっているくらいで、より強く思うことが出来る。

「決めたよ。俺……王都の学院に行つてくる！」

そう言葉にした瞬間、空が、世界を覆う空が、青く微笑んだ。

まるで、母親が子の成長を喜んでいるかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733y/>

唯一の治癒剣士

2011年11月17日09時48分発行